

奄美水産資源有効活用推進事業Ⅰ

(沖合域資源有効活用調査：クロマグロ幼魚資源調査)

榊 純一郎

【目的】

奄美大島南部を中心に行われているクロマグロ養殖業への低コスト養殖用種苗の供給源及び低迷する漁船漁業の新規資源として、奄美海域に来遊するクロマグロ幼魚を活用する可能性を検討する。

【方法】

クロマグロ親魚の産卵期と本県沿岸における来遊時期からクロマグロ幼魚の通過時期を7月初旬と推定し、クロマグロ幼魚の滞留が期待される奄美大島北部の瀬礁域において、調査船は漁業調査船おすみ（63トン）、漁具は一般にクロマグロ養殖用種苗の採捕に用いられる小型潜行板を用い、クロマグロ幼魚の採捕試験を実施した。

【結果及び考察】

平成20年7月1日～同11日までの11日間、奄美大島北部の瀬礁域において、曳縄による採捕調査を実施した。クロマグロ幼魚の採捕はなく、同魚と生息環境が重なるマルソウダが瀬礁周辺で採捕された。また、クロマグロ幼魚と同サイズのキハダ幼魚も前年度に引き続き採捕された。

クロマグロ幼魚は沖縄県南部海域で産卵されたものが8月中旬以降に本県薩摩半島南西部へ来遊する。このことから、同魚は黒潮により本県沿岸まで運搬される可能性が高く、奄美大島海域を7月に通過する仮説が立てられた。この仮説は、昭和63年から平成4年にかけて実施された奄美海域幼稚魚分布調査において、平成2年7月初旬に大型ネットによりクロマグロ稚魚（5.3～13.0mm）が29尾採捕されたこと、熊毛海域において漁業者が7月にクロマグロ幼魚（20cm前後）を採捕した情報と合致するものである。また、同魚が薩摩半島南西部へ来遊することと瀬礁や浮魚礁に蟄集する習性から、奄美大島北部の瀬礁域に滞留する仮説が立てられたが、この仮説は熊毛海域における漁業者による採捕場所の条件と合致するものである。さらに、採捕漁具は、薩摩半島南西部でクロマグロ養殖用種苗採捕に用いられている漁具そのものである。以上をふまえて5ヶ年にわたり調査を実施したが、結果としてクロマグロ幼魚の採捕には至らなかった。このことは、奄美大島周辺においては、来遊する魚体が想定していたサイズ（15～20cm）よりはるかに小型であるか、または主たる移動経路が別にあるために来遊密度が非常に薄いことを示唆するものである。これは同海域において従来のクロマグロ養殖用種苗採捕漁具による採捕が困難であることを示すものであり、すなわち現状では同魚の養殖用種苗及び漁船漁業対象種としての活用が困難であると結論づけられるものである。今後は水産総合研究センター等によるクロマグロ幼魚に関する知見が集積されるのを待って、活用方法を検討することとしたい。